紀　　要

第10号

— 目　次 —

序

縄文時代石器研究の方法論序説……（鈴　木　康　二）

弥生社会からみた独鈷石……（田　井　中　洋　介）

犬上川左岸扇状地における考古学的研究……（近江歴史クラブ）

犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案……（畑　中　英　二）

犬上川左岸扇状地の古墳群について……（北　原　　治）

近江における階段式石室の検討……（堀　　真　人）

犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室……（辻　川　哲　朗）

古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点……（畑　中　英　二）

犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究……（畑　中　英　二）

犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について……（山　中　由　紀　子）

犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について……（中　村　智　孝）

犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観……（畑　中　英　二）

東大寺水沼荘の開発……（神　保　忠　宏・畑　中　英　二）

「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察……（重　岡　　卓）

古代王権論にむけて……（細　川　修　平）

日野町出土の瓦器椀をめぐって……（上　垣　幸　徳）

滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境

井口城とその立地……（神　保　忠　宏）

水と環境教育……（佐　野　静　代）

1997.3

（財）滋賀県文化財保護協会

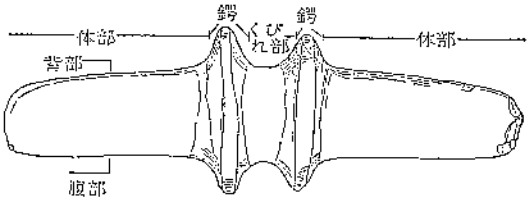
弥生社会からみた独鈷石

田井中洋介

1.はじめに

『縄文時代研究事典』（戸沢充則編　東京堂出版　1994年）で「独鈷石」の項を引くと、「（前略）形状が仏具の独鈷に似ていることから独鈷石とも石鉾とも呼ばれる。（中略）一種の両頭石斧と考えられている。（中略）後期から晩期にかけてみられるが、晩期には非実用的な形態のものが多く、祭祀的な性格をもつ道具へ変化していったと考えられる。出土分布は全国に認められるが、大部分は東日本に集中する。」といった説明が記されている。独鈷石についての一般的な理解としては、上記の説明のようなものであろう。本稿では滋賀県における独鈷石の出土例の集成を行うことを第１の目的とするが、視野を近隣府県にまで広げて、近畿地方周辺における独鈷石のあり方について若干の検討を加え、独鈷石の分布の中心である東日本とは異なる視点を示してみたい。

なお、本稿における独鈷石の形態分類と編年観は後藤信祐氏のものに準拠したい（第６図、文献１）。また、研究者によっては「独鈷石」と「独鈷状石器」という用語が使い分けられているが、本稿では両者を区別せず「独鈷石」という用語に統一する。本稿で用いる独鈷石の各部の名称は、第１図に示したとおりである。



第１図　独鈷石の部分名称
（文献２による）

2.県内の出土事例（第２図・第３図）

(1)安土町大中の湖南遺跡

大中の湖南遺跡は、弥生時代中期前半の遺跡として著名である。独鈷石は発掘調査報告書（文献３）には記載がないが、近江風土記の丘資料館の展示図録等に写真が掲載されるなど、以前から出土が知られており、近年になって遺物実測図が紹介されている（文献４）。

独鈷石はほぼ完形であり、中央のくびれ部が太い点や、体部がくびれ部に対して屈折したような形状を示す形態的特徴から判断して、後藤分類のＢ-（８）型と見なし得るものである。なお、この独鈷石は器表面の劣化が著しいが、劣化の原因として被熱による可能性が考えられる（註１）。

既述のとおり、この独鈷石は発掘調査報告書には記載されていないため、遺物の出土状況等は不明である。大中の湖南遺跡の出土土器等の整理が十分に行われていない現状においては、独鈷石と共伴する遺物はもちろんのこと、遺跡の存続期間も明確でなく、独鈷石の年代については明らかにしがたい。独鈷石の形態からみれば、弥生時代中期前半の遺物と考えて不自然ではないと述べるにとどめておきたい。

(2)長浜市塚町遺跡

長浜市教育委員会によって実施された発掘調査において、自然流路ＳＲ－０１から独鈷石が１点出土している（文献５）。自然流路ＳＲ－０１からは縄文時代晩期（長原式）、弥生時代前期～中期およびそれ以降にまで及ぶ各時期の遺物が出土しており、独鈷石の年代を共伴土器から決定することは困難な状況のようであるが、報告書では縄文時代晩期の遺物と推定している。

独鈷石は両体部の先端を欠損するが、体部が湾曲する形態は確認でき、後藤分類のＢ－（７）型に含まれるものである。使用石材は報告書によれば砂岩とされている。

(3)長浜市山階遺跡出土

長浜市山階町の北方において、江戸時代（天保年間）に野井戸の掘削中に地下２～３ｍの粘土中から出土した遺物と伝えられている（文献６）。島田貞彦氏によって昭和初期に紹介されるなど（文献７）、古くから出土が知られており、現在は琵琶湖文化館に収蔵されている。共伴遺物等は知られておらず、遺物の正確な出土地点も不明であるが、近年の長浜

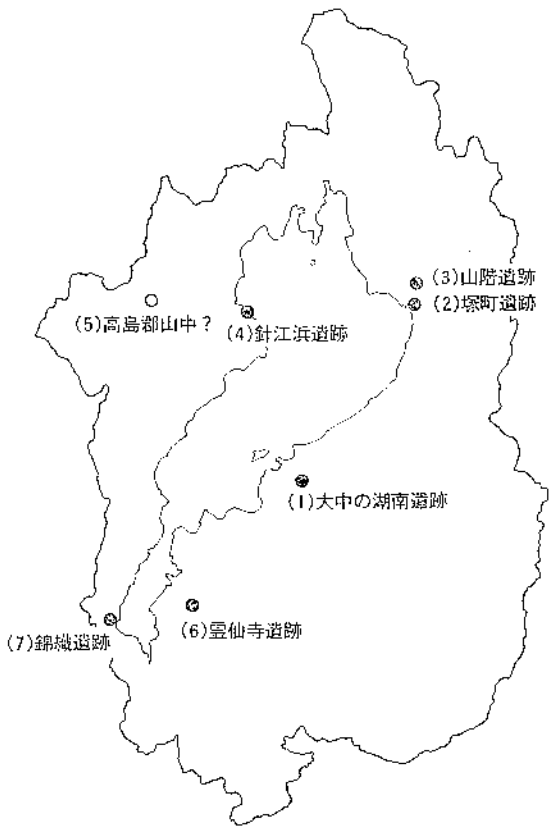
市教育委員会による山階遺跡の発掘調査においても、縄文時代～弥生時代の遺構、遺物は顕著でないとのことである（註２）。私見では、山階遺跡が弥生時代前期の集落遺跡として著名な川崎遺跡に東接する遺跡である点には注意を要すると考えている。

琵琶湖文化館所蔵の遺物を実見し、図化したものを第３図に掲載した。ほぼ完形品であるが、両体部の先端に小さな割れが認められ、両頭石斧として使用された際の使用痕である可能性が高い。体部はやや湾曲し、先端が磨製両刃石斧の刃部状に作られている。全体によく研磨されているが、背部側や腹部側の鍔に近い付近には成形時の敲打痕が散見される。形態は後藤分類のＢ－（７）型に含まれるものである。なお、遺物の発見から長い歳月が経っているために全体に手ずれしていることもあり、肉眼観察では使用石材の識別は困難であるが、粘板岩質とする『改訂　近江国坂田郡誌』の見解に従いたい。重量は399.4gである。

(4)新旭町針江浜遺跡

琵琶湖総合開発事業に伴って昭和63年度～平成元年度に実施された発掘調査（文献８・９）の出土遺物の中に独鈷石の未製品と思われるものが１点存在する（註３）。当遺跡は出土遺物の整理調査がまだ行われておらず、詳細については明らかでないが、遺物の注記によれば弥生時代前期の竪穴住居・掘立柱建物等の遺構が検出された第３遺構面からの出土である。第３遺構面出土の石器の中には、その他にも未製品と考えられるものがあり、当遺跡においては石器の製作を行っていたようである（文献10）。

独鈷石未製品は中央部で折れて、約２分の１が残存している状況である。図に示したとおり、ほぼ全面に敲打痕が残存することから、未製品であろうと推測した次第である。重量は288ｇを量る。未製品であるために、形態についての検討を行う際には注意を要するが、残存部から判断する限りでは、中央背面のみにえぐりを有する形態であり、断面は楕円形を示している。先端は尖らずに丸みを帯びて終わっている。「西日本型」と称される後藤分類Ａ－（５）型に近い形状を示すが、後藤氏の編年観ではこの型式は縄文時代晩期前半以前のものであり、当遺跡の年代と矛盾する。



第２図　滋賀県内の独鈷石出土遺跡

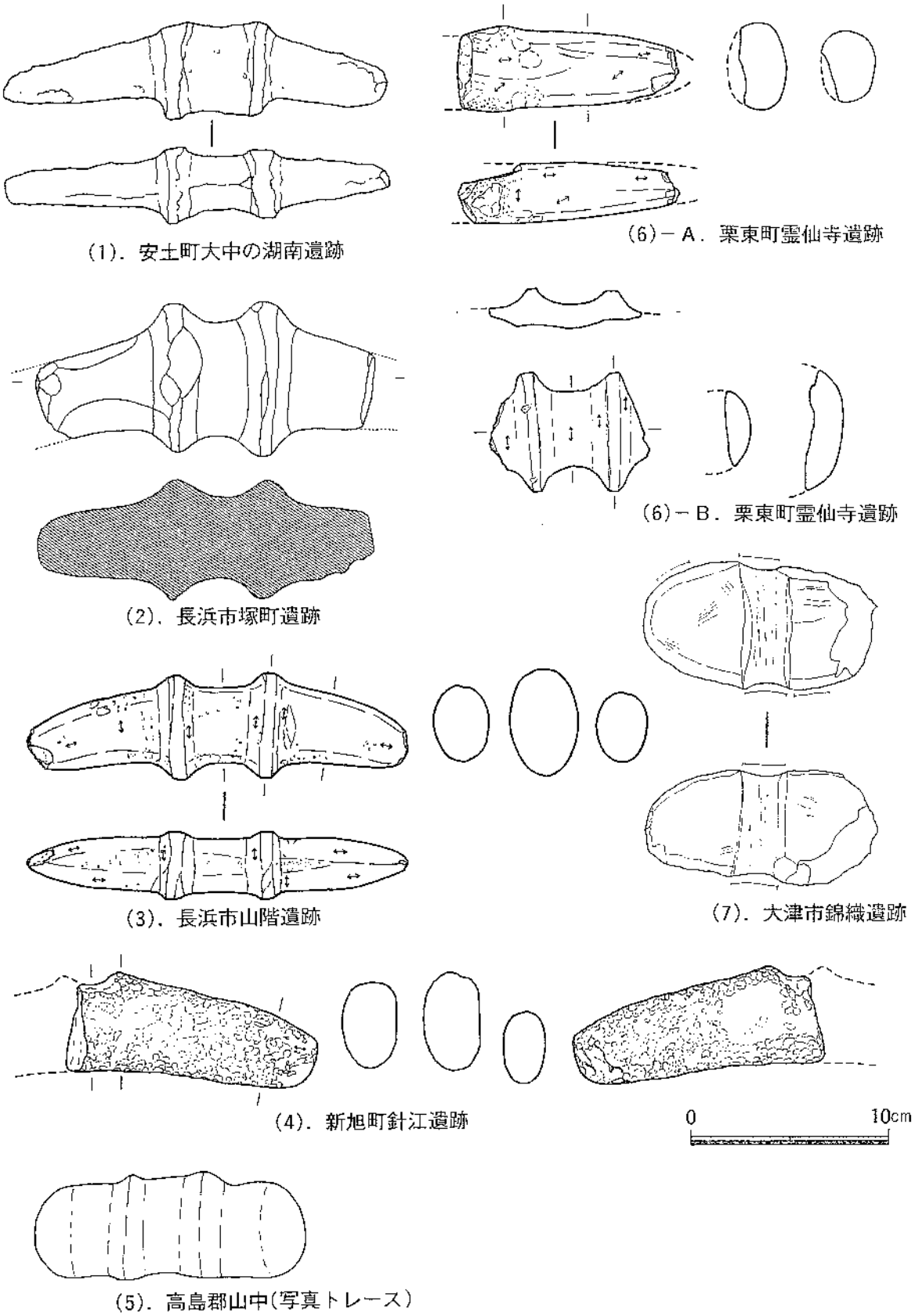
(5)高島郡山中発見？

木内石亭旧蔵品とされる遺物の中に、高島郡の山中で出土したと伝えられる独鈷石が１点あることが写真で紹介されている（文献７）が、現在の遺物の所在は明らかでない。共伴遺物等は知られていない。独鈷石の形状は、写真を見る限りでは体部先端が丸く終わり、低い鍔部を有する。後藤分類のＢ－（１）型に含まれるものか。

(6)栗東町霊仙寺遺跡

霊仙寺遺跡は、主として縄文時代中期と弥生時代前・中期の複合遺跡であり、縄文時代の遺構としては土坑数基と沼沢地、弥生時代では中期の方形周溝墓などが知られている（文献11）。縄文土器の中では中期末の北白川Ｃ式土器が多く、これに先行する船元・里木式土器も出土している。

当遺跡から独鈷石が出土していることは、野洲町立歴史民俗資料館で1995年に開催された春期特別展「滋賀の石器時代」において紹介されている（文献12）。独鈷石は２点あり、異なる調査区から出土した遺物である。発掘調査報告書が刊行されていないため、共伴遺物等の詳細は知り得ないが、発掘調査担当者の松村浩氏のご教示によれば、独鈷石は２点とも遺物包含層からの出土であり、所属時期はあま



第3図　滋賀県内出土の独鈷石実測図

り明確でないとのことである。ただし、Bの独鈷石が出土した調査区においては出土土器は弥生時代前期のものにほぼ限定でき、独鈷石も当該時期のものである蓋然性が高いと考えられる。

２点の独鈷石は栗東歴史民俗博物館に保管されており、実見して図化する機会を得たので紹介したい。Aの独鈷石は中央のくびれ部付近で折れて約２分の１が残存する個体である。また、体部の先端も欠損しているため全形は明らかでないが、鍔が不明瞭でくびれ部にかけてなだらかに移行し、体部はまっすぐ延びて先端部が尖り気味になるようである。後藤分類のA－(２)型に含まれるものとしておきたい。なお、くびれ部付近には、背部側と腹部側を中心に成形時の敲打痕が残るが、それ以外の箇所はよく研磨されている。使用石材は筆者の肉眼観察によれば黒っぽい頁岩であり、残存重量は201ｇである。共伴土器は明確でないが、形態的には古い様相を示す資料である。

Bの独鈷石は鍔部と中央のくびれ部が一部残存するのみの破片であり、明瞭な鍔部を有することはわかるが、体部の形状等は不明である。ただし、鍔部が正確な平行になっていない点に着目すれば、体部は湾曲した形態になるものかもしれない。この点を重視して後藤分類のB－(７)型に含まれるものとしておきたい。鍔部とくびれ部には縦位の研磨痕が顕著である。使用石材は筆者の肉眼観察では粘板岩もしくは頁岩と考えている。重量は89ｇである。

(7)大津市錦織遺跡

昭和55年度の発掘調査において（55－５地点）、遺物包含層中からほぼ完形の独鈷石が１点出土している（文献13）。遺物包含層からの出土品である上、調査区内では奈良時代以降の遺構・遺物が多く、遺物の時期決定は困難である。

独鈷石は鍔部を有さない型式のものであり、体部は短い。報告書によれば、くびれ部が丁寧に磨かれるのに対して体部の磨きが不十分とのことである。後藤分類のA－(１)型に含まれる形態である。この形態の独鈷石については、用途を石錘と考えて独鈷石からは除外する意見もある（文献14）が、筆者はこの点については論じる準備がなく、本稿では独鈷石に含めておきたい。

以上のように滋賀県内においては、管見によれば７遺跡８例の独鈷石の出土が知られている。共伴遺物の明確でない事例が多いが、針江浜遺跡例が弥生時代前期のものであることは確実であろう。このほかにも、霊仙寺遺跡（B）例と大中の湖南遺跡例は弥生時代のものである可能性が高いと考えている。なお、滋賀県においては弥生時代前期の遺跡の良好な報告例が乏しい中で、針江浜遺跡と霊仙寺遺跡は当該時期の代表的な遺跡として知られている。滋賀県内の弥生時代前期の遺跡からは、今後も独鈷石が出土する可能性が考えられる。

３.近隣府県の出土例（第４図・第５図）

次に、滋賀県の近隣府県における出土例を、共伴遺物から年代が推定できる発掘調査例を中心に見ていきたい（註４）。

(8)大阪府東大阪市宮ノ下遺跡

近年報告された資料である（文献15）。A地区で検出された貝塚のうち、貝層２上部から独鈷石が１点出土している。鍔の部分は完存するものの、両方の体部を欠損しているために全体の形状は不明であるが、残存部から判断して、体部がかなり湾曲した形態をとるものと推定復元できる。また、体部に比べて鍔の間のくびれ部が太いという特徴を示すことから、後藤分類のB－(８)型と判断できる。使用石材は玄武岩質火山礫凝灰岩と報告されている。

独鈷石の出土した貝層２上部からの出土土器は弥生時代中期初め（第Ⅱ様式）のものが主体であり、前期（第Ⅰ様式新段階）のものも含まれる状況である。このため、独鈷石も弥生時代中期初めの遺物である蓋然性が高いが、貝層２の下部・中部で主に出土する縄文時代晩期（船橋式～長原式）の突帯文土器も貝層２上部から二次的な状態で出土しているため、縄文時代晩期の遺物の混入である可能性は否定できない。

(9)奈良県田原本町唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡の第22次発掘調査において、中世の土坑ＳＫ－51から独鈷石が１点出土している（文献16）。遺構埋土内からは弥生時代の土器・石器が多量に出土しており、周辺にあった弥生時代の遺構が

破壊された際に出土して再投棄された可能性が高い。このＳＫ－51出土の弥生土器には第Ⅰ様式末～第Ⅱ様式のものが多く、東海系の条痕文土器の内傾口縁土器や厚口鉢片も多く含まれている点は注目される。

独鈷石は中央のくびれ部で折れて、約２分の１弱の出土であるが、残存部から判断して、体部がわずかに湾曲した形態をとるものと考えられる。体部先端は一部破損しているが、概ね丸く終わる形状のようである。全体に丁寧な研磨がなされており、赤色の塗彩も一部に観察できると報告されている。湾曲する体部から判断して、後藤分類のＢ－（７）型に含まれるものか。使用石材は玄武岩質片岩と報告されている。

第４図　近畿地方の独鈷石出土遺跡

この唐古・鍵遺跡出土の独鈷石は中世の土坑への混入品ではあるが、土坑内から出土した土器から判断して弥生時代の所産である可能性が報告書においても指摘されている。

⑽奈良県榛原町高井遺跡

榛原町教育委員会による発掘調査において独鈷石が１点出土している（文献17・18）。高井遺跡においては縄文時代後期前半の竪穴住居や縄文時代中期末葉～後期前葉の土坑群などの遺構が検出されているが、独鈷石は遺物包含層からの出土であり、包含層出土土器も縄文時代中期末葉から後期前葉のものが大半を占める。独鈷石もこの時期の遺物と考えておきたい。

独鈷石は写真のみしか紹介されていないが、この写真を見る限りでは、ほぼ完形品である。背部側に鍔状の盛り上がりがあるが、腹部側には巡らず、体部は湾曲して先端が尖る形態である。後藤分類のＡ－（５）型（西日本型）に含まれるものであろう。

⑾福井県三方町北寺遺跡

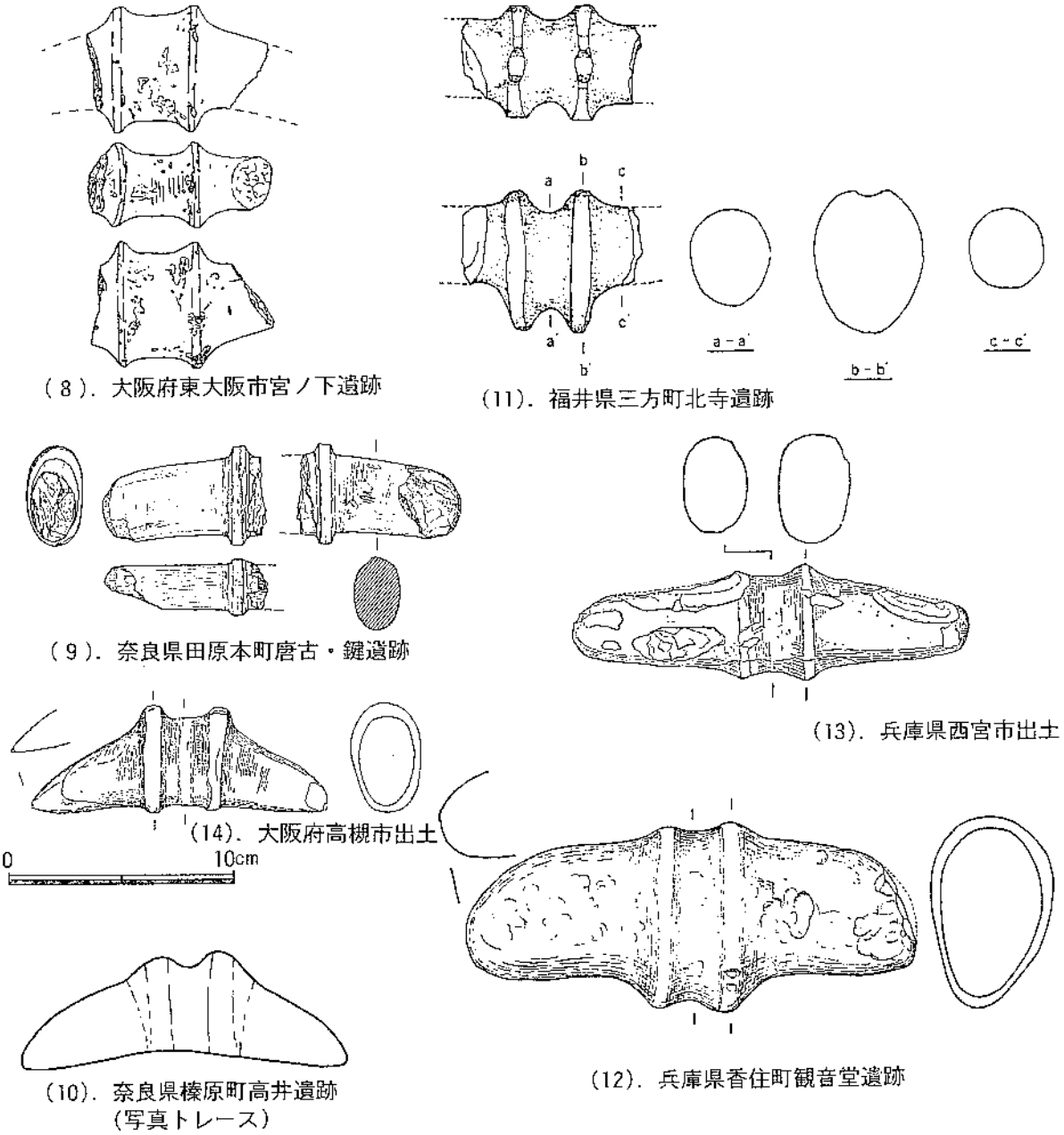
福井県における独鈷石の出土例は、越前地方で若干の表採資料が知られていた程度であったが、三方町教育委員会が平成２年度に実施した発掘調査において、若狭地方では初めて独鈷石が出土した（文献19）。縄文時代中期末（北白川Ｃ式）～後期前半（四ツ池式）の土器を包含する茶褐色木本質泥炭土層からの出土であり、おそらくは土器の示す年代幅の中に含まれる時期の遺物であろう。

独鈷石は両体部を欠失しており、中央部のみの残存であるため全形は不明であるが、鍔の突出が明瞭で、鍔の腹部側にくぼみがある。くびれ部と体部が段違い状になっており、体部は比較的細く、やや湾曲するようである。後藤分類のＢ－（７）型に含まれるものか。報告書の記述によれば使用石材は閃緑凝灰岩であり、一部に二次加熱を受けたと思われる痕跡が見られるとのことである。

管見によれば、以上の他に（12）兵庫県香住町観音堂遺跡（Ｂ－（７）型、文献20）、（13）兵庫県西宮市（Ｂ－（２）型、文献２）、（14）大阪府高槻市（Ｂ－（７）型、文献21）、（15）奈良県都祁村（文

献18）の4例の出土が知られている。都那村例については十分な資料を入手できなかったため、本稿では割愛する。その他の3例も発掘調査によって出土したものではなく、共伴遺物等が知られていないため帰属時期を決定しがたい事例であり、遺物実測図のみを掲載した。

以上、近畿圏における独鈷石の出土例を紹介してきたが、十分な資料検索が行えていないため、遺漏があることと思われる。従って、滋賀県内の資料との比較検討を行うにあたっては資料集成の精度に留意する必要があるが、次節において若干の検討を行ってみたい。



（8）．大阪府東大阪市宮ノ下遺跡

（11）．福井県三方町北寺遺跡

（9）．奈良県田原本町唐古・鍵遺跡

（13）．兵庫県西宮市出土

（14）．大阪府高槻市出土

（12）．兵庫県香住町観音堂遺跡

（10）．奈良県榛原町高井遺跡
（写真トレース）

第5図　近畿地方出土の独鈷石実測図

4．若干の検討

ここまで紹介してきたように、近畿地方においては独鈷石の出土が少ないながらも認められる。その中で、滋賀県における独鈷石の出土遺跡数は7遺跡あり、他の府県に比べて多いことが指摘できる。滋賀県は東日本に隣接する地域にあり、隣の岐阜県では飛騨地方のみで66例の独鈷石の出土が知られている（文献22）。独鈷石が東日本から伝播してきた文化要素であると一般に考えられていることからみれば、滋賀県においてそれなりの出土例があることは妥当な結果と見なし得る。とはいえ、滋賀県内における独鈷石の出土点数はわずか8点であり、岐阜県との差は大きい。

次に近畿地方における独鈷石の時期的変遷を見てみたい。既述のとおり奈良県高井遺跡例が縄文時代中期末～後期前半のものと考えられ、近畿地方では最も古い例である。福井県北寺遺跡例もほぼ同時期の遺物である。滋賀県においても、栗東町霊仙寺遺跡（A）例が縄文時代中期末の遺物である可能性があるが、明確でない。東日本における独鈷石の初現は明確でないが、縄文時代後期になって出現するという通説的見解に従えば、東日本と比べてあまり遅れない時期に近畿地方にも独鈷石が出現したものと考えられる（註5）。

一方、これに続く縄文時代後期後半～晩期のものと見なし得る独鈷石の出土例は、近畿地方には確実な例がなく、長浜市塚町遺跡例のように晩期末の可能性があるものが若干存在する程度である。これに対して、弥生時代前期～中期前半のものと考えられる事例は散見されるのであり、近畿地方においては弥生時代に入ってから独鈷石の出土例が増える傾向にある。とはいえ、近畿地方における独鈷石の出土事例は、この時期においても限られており、もちろん石器組成の一部を占める位置にはない。弥生文化が西日本から東日本へと伝播していく過程で、特殊な遺物として東日本から搬入されたものであろうか。しかしながら、滋賀県針江浜遺跡例は独鈷石が集落内で製作されていたことを示しており、近畿地方の弥生遺跡において出土した独鈷石を単なる搬入品として片付けることはできない。独鈷石の石材観察においても、現時点では遺物の搬入を積極的に示す材料は乏しい。

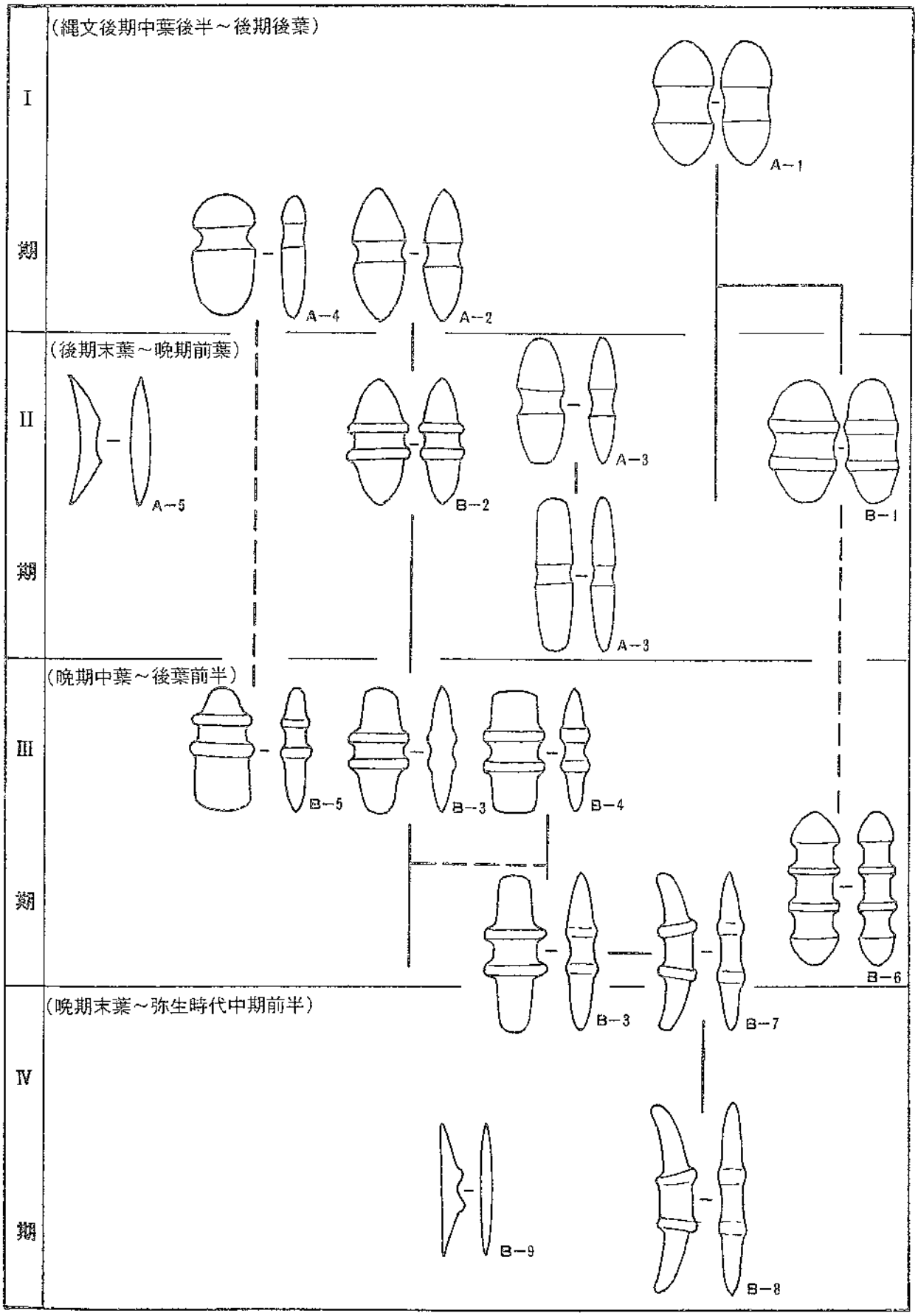
近畿地方において出土する独鈷石の形態は、後藤分類のB－（7）型が主体となっており、その他にB－（8）型、A－（5）型などがある。ただし、B－（7）型とB－（8）型の間の判別が困難なものも存在している。後藤氏の編年観によれば、独鈷石の形態から見ても近畿地方出土の独鈷石には縄文時代晩期後葉以降のものが多いという結論が得られる。とはいえ、針江浜遺跡例などのように共伴する土器が示す年代と後藤氏の編年観が整合しない事例もあり、型式分類と編年観の修整が必要と考えられるが、今後の課題としたい。

5．まとめにかえて

全国における独鈷石の出土点数は、渡辺誠氏が今から25年以上も前に集成されたという約600点という数字（文献20）が引用されることが多いが、その後の出土例や表採品の集成作業が各地で進められてきた状況から見て、現在ではこれを大きく上回る出土例があるものと想像される。しかしながら、出土点数の多さが災いして、全国的な集成作業は十分に行われていない状況である。また、発掘調査によって遺構から出土した事例は意外に少なく、これまで多くの研究者によって一定の集成、分類作業が行われてきたにもかかわらず、その出現、展開、消滅について十分な年代的位置づけが示されているとは言いがたい。

一方、近畿地方における出土点数は10数点にとどまり、本稿において一定の集成を試みた。資料集成としては不完全であり、十分な検討も行い得ていない段階で稿を成したために不十分な内容ではあるが、近畿地方においては縄文時代晩期に比べて、弥生時代前期～中期前半になって独鈷石の出土事例が増える傾向にあることは示し得た。弥生遺跡における独鈷石の出土を、単なる縄文文化的要素の残存とするのではなく、近畿地方、特に滋賀県における弥生社会成立期のひとつの側面として注目する必要性を指摘しておきたい。

なお、本稿を執筆するにあたっては以下の方々および諸機関の御教示と御協力を得ました。末筆ながら記して感謝いたします。



第６図　後藤信祐氏による独鈷石の分類と変遷模式図(文献１に加筆)

伊藤潔　岡本孝之　大沼芳幸　後藤信祐　中村健二　前迫亮一　松村浩　宮成良佐　村上由美子　吉田秀則　和田秀寿　高山市教育委員会　榛原町教育委員会　三方町教育委員会　栗東歴史民俗博物館　琵琶湖文化館

註

(1)慶応義塾大学　岡本孝之氏の御教示による。

(2)長浜市史編さん室　宮成良佐氏の御教示による。

(3)発掘調査担当者の大沼芳幸氏の了解を得て、図化して紹介するものである。

(4)ここで取り扱うのは概ね近畿地方の範囲であるが、福井県若狭地方を含めることとして北寺遺跡例を採録した。三重県については、十分な資料検索ができなかったため、知り得た3例の遺跡位置のみを掲載するにとどめた。

(5)近年、鹿児島県鞍谷遺跡出土の独鈷石を、出土土器から縄文時代前期末～中期中頃のものと考え、西日本の独鈷石を東日本とは切り離して考える見解が示された（文献23）。独鈷石の出現が縄文時代中期にまで遡る可能性を示すものとして注目されるが、今後の類例の増加を待ちたい。

文献

1．後藤信祐「独鈷状石器小考」（『唐澤考古』5　唐澤考古会　1985年）

2．島津義昭「西日本の独鈷状石器」（『九州考古学の諸問題』　福岡考古学研究会　1975年）

3．『大中の湖南遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会　1968年）

4．小竹森直子「館蔵品資料調査報告　大中の湖南遺跡出土の石器類について」（『紀要』第3号　安土城考古博物館　1995年）

5．『地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書』（長浜市教育委員会　1995年）

6．『改訂　近江国坂田郡誌』第一巻（滋賀県坂田郡教育会　1941年）

7．『滋賀県史蹟調査報告　第一冊　有史以前の近江』（滋賀県　1928年）

8．『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』（滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　1989年）

9．『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』（滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　1990年）

10．大沼芳幸「新旭町・針江浜遺跡の調査から」（『滋賀考古』第3号　1990年）

11．『栗東の歴史』第4巻　資料編Ⅰ（栗東町史編さん委員会　1994年）

12．『春季企画展　滋賀の石器時代』（野洲町立歴史民俗資料館　1995年）

13．『錦織遺跡―近江大津宮関連遺跡―』（滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　1992年）

14．『飛騨の考古学遺物集成Ⅱ』（高山市教育委員会　1987年）

15．『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』（東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会　1996年）

16．『昭和60年度　唐古・鍵遺跡 第22・24・25次発掘調査概報』（田原本町教育委員会　1986年）

17．『榛原町遺跡分布調査概要　榛原町文化財調査概要2』（榛原町教育委員会　1987年）

18．『遺跡でみるむかし、むかしの榛原』（榛原町教育委員会　1988年）

19．『三方町文化財調査報告書　第11集　市港遺跡・北寺遺跡』（福井県三方郡三方町教育委員会　1992年）

20．渡辺誠「兵庫県城崎郡香住町の縄文時代遺物」（『古代文化』第23巻第4号　財団法人古代学協会　1971年）

21．渡辺誠「大阪府高槻出土の独鈷状石器をめぐって」（『考古学論叢』Ⅰ　別府大学考古学研究会　1973年）

22．『特別展　飛騨のあけぼの』（岐阜県博物館　1992年）

23．東和幸「独鈷状石器」（『大河』第4号　大河同人　1993年）

編　集　後　記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があろうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成９年３月

紀　要　第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL：(0775－48－9780)

印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社
滋賀県長浜市森町中久保386